



TITLE:

潜在偏向性の我がインフレーション

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

---

CITATION:

小島, 昌太郎. 潜在偏向性の我がインフレーション. 経済論叢 1933, 37(5): 639-665

ISSUE DATE:

1933-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130374>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第

卷七十三第

行發日一月一十年八和昭

## 論叢

營業收益稅改造の一案……………法學博士 神戸正雄  
勞銀と利子……………文學博士 高田保馬

## 時論

潜在偏向性の我がインフレーション……………經濟學博士 小島昌太郎

## 研究

中央銀行の發行準備に就いて……………經濟學士 松岡孝兒  
資本蓄積と資本有機的構成の變化……………經濟學士 柴田敬  
國際カルテルに就いて……………經濟學士 磯部喜一  
アングロ時代サクソンの社會單位について……………經濟學士 竹中靖一

## 說苑

小賣商業の競争と分業……………經濟學博士 谷口吉彦  
資本主義の型……………經濟學士 堀江保藏

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁載轉）

## 潜在偏向性の我がインフレーション

小島 昌太郎

## 一

我が經濟界に於けるインフレーションは、謎の如き存在になつて居る。昨年<sup>の</sup>末頃には、或るものは、今にも紙幣の洪水に見舞はれるが如き話をして居り、恰もさやうな際に、十二月三十一日の日本銀行兌換券發行高は、十四億圓を超え、六年同日に比ぶれば一億四千萬圓、平日に比ぶれば四億圓程の増發であつたから、この話に裏書するが如き觀を呈した。併しながら、兌換券はその後、減縮の傾向を辿り、五月中旬には、九億八千萬圓に落ち、むしろ、五年、六年、七年の平均發行高をさへ下廻る狀勢にあつた。すると、我が國にはインフレーションなどいふものは起らないものだといふ説も聞えて來た。そして、それは、謂はゆる日本銀行のオペレーションなるものによつて、抑制されて居るからだと説明せられた。ところが、最近には、また、縦ひオペレーションなるものによつて抑制されても、紙幣インフレーションは、將來、到底、免れざる所だ

との見解が、強調されるやうに見受けられる。

將來に關する豫想は、豫見者に委すの外はない。ただ、私は、世間のインフレーションに關する見解は、殊に、右に述べたやうな考へ方は、インフレーションといふものを、現金通貨、今日の現狀に於ては、特に日本銀行の兌換券のみについて考へて居ると思はれるから、——そして、またそのやうな考へ方が、インフレーションやオペレーションについての重大な誤解の基となつて居るものであるから、——ここには、先づこの現金通貨なるものを説明して、その正確なる了解の下に、我が國のインフレーションは如何なる意味のものであり、如何なる狀態の下に起るものであるかを明かにしたいと思ふ。

## 二

ドイツ國統計年鑑<sup>1)</sup>によると、戰前、一九一三年の帝國銀行券の流通高は、二、一一三百萬マルクであつたが、戰後の一七年には九、二三〇百萬マルクとなり、二一年には八〇、九五二百萬マルク、二三年には、一躍、三三九、六七五百萬マルクとなつて居る。

帝國銀行券の外にドイツに於ては、紙幣として、貸附金庫證券、帝國金庫證券、私立銀行券の三種の紙幣があるから、これらをも合せた金額を見ると、一九一三年のそれら四種の紙幣合計流通高は、二、三六九百萬マルク、一七年には一四、三七三百萬マルク、二一年には、九〇、四三二百萬マルクであつて、二二年には實に三五一、七三九百萬マルクとなつたのである。

1) Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, 1923.

ドイツには、現金通貨としては、この外は鑄貨がある。併し鑄貨はむしろ前掲期間に於ては漸減して居る。すなはち、一九一三年のその流通高は、三、七〇〇百萬マルクで、帝國銀行券よりも一、五八七百萬マルク多く、各種紙幣流通高合計に比べても三三一百萬マルク多かつたのであるが、一七年には、一、二三九百萬マルクとなり、二一年には、僅に三五八百萬マルクに減じ、二二年には統計上に於て流通高は皆無となつて居る。

かくの如くであるから、ドイツに於けるインフレーションは、紙幣の増發によつて起つたものであるが、今その一九二二年までの状態を實數と指數とを以て示せば次の如くである。

年次	鑄貨及び各種紙幣合計	1913年を1とする指數
1913	6,070	1.0
14	7,045	1.1
15	8,916	1.4
16	10,400	1.7
17	14,851	2.4
18	22,751	3.7
19	41,020	6.7
1920	67,889	11.1
21	90,791	14.9
22	352,173	58.0

併しかくの如きは、まだインフレーションの前期である。その後期インフレーションは、一九二三年に起つた。すなはち、一九二二年一月末の鑄貨及び各種紙幣流通高總計は、一二四、四二五百萬マルクであつて、一九一三年を一とする指數に於ては、二〇・五となつて居たのであるが、同年十二月には、一、二九五、二二八百萬マルクとなり、指數は、二二三・三となつた。併し、翌二三年の

一月には、計數單位を換へて計へねばならぬ位の巨額となり、流通高は一、九九九、十億マルク、指數三二九・四となり、同年十月には、實に二、五〇四、九五五、七一七、十億マルク、指數に於ても、

年 月	鑄紙幣及各種流通總額	1913 年を 1 とする指數
1922 1	百萬マルク 124,425	20.5
2	129,016	21.2
3	140,494	23.1
4	150,752	24.8
5	162,545	26.7
6	180,766	29.7
7	203,246	33.4
8	252,857	41.6
9	332,562	54.7
10	484,685	79.8
11	769,499	126.7
12	1,295,228	213.3
1923 1	1,999,6—	329.4
2	3,536.3—	582.6
3	5,542.9—	913.2
4	6,604.5—	1,088.1
5	8,643.8—	1,424.0
6	17,392.8—	2,865.4
7	43,892.7—	7,231.1
8	668,797.8—	110,180.9
9	28,244,405.8—	4,653,115.0
10	2,504,955,717.6—	412,678,042.0

四一二、六七八、〇四三となつたのである。その統計を示せば上掲の如くである。

ドイツのインフレーションを、同國統計年鑑の數字を以て示せば右の如くである。一九一三年から、あの大戦を経て十一ヶ年間に、

現金通貨が實に四億一千二百何十萬倍になつたのである。

### 三

ドイツのインフレーションは、かくの如く目に見え、手に觸れ得る所の現金通貨を以て行はれた。従つて、我が國に於ても、インフレーションと言へば、現金通貨に着目せられ、現行制度に於ては、日本銀行券の膨脹に注意の向けられることは無理からぬ事柄である。併しながら、我が國の今日と、ドイツの當時とは、事情が全く異つて居る。従つて、ドイツのやうに、表顯的普遍

的なインフレーションとしては、著しきものとならないで、我が國に於ては、今日までの所、そして近き將來に於ても、潜在的偏向的インフレーションとして起るものと見なければならぬ。

ここに潜在的インフレーションといふは、現金通貨のインフレーションのことではなくして、預金通貨のインフレーションのことを言ふのである。また偏向的インフレーションといふのは、一般物價の騰貴をも惹き起すけれども、それよりも特殊商品の物價に於て著しき騰貴を惹き起すことをいふのである。

ドイツに於ては、戰敗の結果として、ヴェルサイユ條約により、謂はゆる天文的數字といはるゝ所の非常に巨額の賠償債務が生じた。それがため、對外收支のバランスは破れ、巨大なる支拂割定となつた。それは、爲替相場の激甚なる下落を惹き起し、輸入品及び輸出品の暴騰により、一般物價は、それに追隨し、その取引決済に巨額の貨幣を必要としたのであるが、かかる物價暴騰の時代には、銀行預金は凍結凝縮して、預金通貨の活動は停止し、取引の支拂決済は現金通貨を以てするの外なきに立ち至り、その貨幣需要に應ずるためと、そしてもう一つの事情としては、政府の財政上、不足歳入の補填調達のために、前述のやうな驚くべき巨額の紙幣發行が惹き起されたのである。

併し、我が國に於ては、金輸出禁止により、對外爲替相場は、平價の半分程に下落はしたけれども、國內の一般物價はただ僅の騰貴をしただけで、銀行に於ける預金信用を害するに至つて居

らず、むしろ、對外貿易の圓勘定に於ける利益の激増により、遊資の増加を惹き起して居る有様で、銀行預金は愈々増加の傾向を辿り、それが預金のままにて支拂決済の役目を果し、預金通貨は頗る健全なる状態に於て活動して居る。

かくの如く、預金通貨が健全に活動し得る状態に於ては、政府が歳入不足を公債を以て支辨するの政策をとつても、それは、現金通貨の膨脹を必ずしも惹き起すものではない。少くとも、ドイツと同様な意味でインフレーションが起ると見るは、速断の見解である。

預金通貨の健全に活動する限りは、政府が財政補填のために、日本銀行の引受にて公債を発行し、それによつて財政支出をしても、預金通貨の膨脹とはなるけれども、この政府の財政支出が一般の小賣取引の隆盛を惹き起さない限りは、現金通貨の膨脹となるものではない。小賣取引が隆盛を來すに至れば、その支拂決済の必要上、現金通貨は膨脹することとなるけれども、この段階を経過しないでは、公債の發行と現金通貨の増發、すなはち日本銀行兌換券の増發との間に、直接の連絡はないのである。

然るに、世間の一部では、我が國のインフレーションも、日本銀行の兌換券の増發があつて、初めて、起るもので、その増發がなければインフレーションではないと考へて居るやうであるが、それは大なる誤解である。



我が國に於て、今日、支拂の決済に用ゐられて居る通貨は、現金通貨と預金通貨とであることは今更申すまでもない。そして今日の實狀に於ては、現金通貨は、補助貨幣と日本銀行兌換券——朝鮮銀行券及び臺灣銀行券のことは、姑く省略する——とであり、その主要なるものは後者である。従つて、實際上に於ては、如何に現金通貨が伸縮したかを見るには、日本銀行兌換券が如何に伸縮したかを見れば事足るのである。

預金通貨といふのは、支拂の決済に充てらるる銀行預金である。預金が預金のままで、一人の所有から他人の所有に移さるることによつて、支拂の決済の役目を果すとき、それを預金通貨といふのである。如何なる預金も、かくの如き役目を果すならば、それは預金通貨となる。併し、最も普通なのは、當座預金であり、それが支拂の決済の役目を果すについて用ゐらるる手段たるものは、通常小切手である。

それ故に、預金通貨の膨脹縮少は、その母體たる預金、特に當座預金の増減によつて、これを知ることが出来るのであり、その活動の盛衰は、手形交換高の増減によつて窺ふことが出来るのである。

預金は如何なる種類のものも、預金のままで支拂ひに充てらるることが可能であると共に、また、勿論、現金として引出され得るものでもある。すなはち、預金は、如何なる種類のものでも預金通貨若しくは現金通貨として、支拂の決済に充てられ得る狀態に於て潜在する所の通貨母體

と見ることが出来る。この意味に於て銀行の預金は潜在通貨といはれる。

今日の我が支拂決済の實際に於ては、現金通貨は、俸給勞賃の支拂、小賣取引の支拂に用ゐらるるのであつて、比較的小額の支拂の場合に働くのである。預金通貨、すなはち手形小切手若しくは振替手續（以下略して總て單に小切手といふ）を以て支拂はるるのは、比較的多額の支拂の場合の殆ど總てであつて、小賣以外の商取引は勿論、資金移動の取引すなはち有價證券の賣買、株式公社債の拂込償還などは、小切手決済のものである。

昭和八年自一月至八月手形交換高				
	枚 數	金 額	平均一枚 金 額	
東 京	8,810,248	21,058,147,922	2,378	
大 阪	6,698,548	12,715,039,119	1,896	
神 戸	1,687,598	2,949,707,740	1,735	
京 都	1,392,503	875,331,538	626	
横 濱	540,754	796,251,635	1,474	
名古屋	1,431,645	1,777,712,262	1,242	
其 他	3,169,822	1,870,181,179	598	
十ヶ所計	23,731,108	42,042,371,395	1,772	

式公社債の拂込償還などは、小切手決済のものである。

これを我が全國手形交換所の交換高について見るに、本年一月より八月までの八ヶ月間に於て、全國手形交換所三十六箇所（但し内、盛岡は缺につき實際は三十五箇所）の總交換高は、四百二十億圓で、枚數二千三百枚であるから、平均一口の交換額、即ち小切手金高は一千七百七十二圓であり、東京の平均額は、二千三百七十八圓、大阪は、一千八百九十六圓、京都は六大都市の中で最も少く、六百二十六圓である。六大都市以外の三十箇所平均は五百九十八圓であり、その中最も少きは仙臺の二百三十八圓である。

巨額の取引の決済は、すべて小切手によるのであるから、

前掲の平均金額は、それに含まるゝ所の巨額のものによつて、引上げられて居ることを見逃してはならぬ。故に支拂金額の幾許位のもの以上が、小切手で支拂はれるのであり、幾許位までが現金にて支拂はるのであるかを、上述の手形交換の一枚平均金額より、直接に知ることは困難であるけれども、大體の推測によれば、大都會に於ては、五百圓以上、田舎の小都會では二百圓以上は大體、預金通貨で支拂はれ、それ以下の金額が、大體、現金支拂のものと見て差支ないといふことである。殊に多額の支拂となるほど小切手を用ゐられ、小額の支拂となるほど現金が用ゐらるるは言ふまでもない。

## 五

現金といへば、本位貨幣と補助貨幣と銀行券若しくは紙幣とである。我が國の現在に於ては、本位貨幣と紙幣とは流通して居ないのであるから、結局、我が國今日の現金は、實際的に言へば、補助貨幣と日本銀行兌換券——外地には、朝鮮銀行券と臺灣銀行券とがあるが——とである。

最近の金融事項參考書<sup>1)</sup>によれば、七年六月末に於て、我が補助貨幣は、發行鑄潰殘高として、新舊を合し、四億一千五百萬圓が示されてある。日本銀行兌換券は、同じく七年六月末に於ては十億八千六百萬圓——朝鮮銀行券、七千五百萬圓、臺灣銀行券、四千三百萬圓——で、内地現金の合計は、大體十五億圓、——外地を合計すれば、十六億一千八百萬圓——である。最近の日本銀行兌換券の發行高も、殆ど當時と變化はない。

1) 昭和7年12月發行

併し、補助貨幣にしても兌換券にしても實際は滅失毀損したものもある筈だから、これらの數字より幾許か割引して考へなければならぬ。その滅失毀損が幾許であるかはもとより分らない。これらの現金通貨の流通状態並びに預金通貨との數量的關聯は、これを正確には知ることとは不可能である。たゞ吾々は銀行に出入する所の現金の増減推移によつて、間接に、これを知り得るに過ぎない。

併し、この場合、注意すべきことは、銀行的用語としての『現金』といふ言葉が甚だ曖昧なことである。そして、それは常に、私が前に述べた意味のものと異つて居る。私は、現金通貨と預金通貨とを切然分別して居るのであるが、銀行的用語に於ける『現金』には、私の述べた所の現金通貨の外に、或範圍内の預金通貨が含まれて居るのである。甚だしき場合には、預金通貨のみの支拂の場合でも、我が國の銀行的用語では、或るときにはこれを現金支拂と言ふて居るのである。かやうな銀行的用語が、屢々、現金に關する觀察を著しく誤らしめるのである。

その最も甚だしいのは、公社債の現金償還といふ言葉である。例へば新聞紙上には、ときどき大藏省證券何億圓が『現金償還』せられたといふ記事を見受けるけれども、これを以て、この證券の所有者が證券と引換へに現金、すなはち、日本銀行兌換券をその金額だけ受取つたと速断してはならない。この場合の證券所有者は主として銀行であつて、銀行は、この場合、日本銀行に大藏省證券を引渡すと共に、その金額だけ、自行の日本銀行に於ける預金として置くのである。

それ故に、政府預金が一般預金に振替へられるだけである。銀行は後に至つて、他に必要があるならば、この預金を現金を以て引出すこともあらうけれども、然らざる限り、言ひ換ふれば、手許現金が缺乏しない限りは、現金の引出を行はない。だから、『現金償還』といつても、實際は預金通貨を以て償還するである。『現金償還』は單に『借換償還』に對應する言葉である。

また、現金なるものが、一體どの位、世間に存在するかといふことを知るには、前に述べたやうに發行の側から推測し得るのであるが、更に、銀行に於ける手許殘高を見るのも一方法である。

——勿論、これが縦ひ正確に知り得ても、それによつては、世間に於ける存在量の一部分を知り得るだけで、銀行以外の存在量は分らない譯であるが、併し、時間的に比較することによつて、世間に流通する現金量の増減の有様を知ることが出来る。——併しながら、銀行は現金有高なるものを手形交換所に報告するに當り、日本銀行に於ける預金も現金と認めてこれに計上して居る。

すなはち、この場合に、何時にても現金となるといふ意味で、潜在通貨たる所のものを、現金と同視して居るのである。従つて例へば、昭和八年八月末日現在の全國手形交換所組合銀行本店合計三百三十七行の現金有高は、四三三、六六三千圓と發表せられてあるけれども、この中には、當該銀行の日銀預金が含まれるのであるから、この金額を以て現金額だと速斷することは出来ない。また日本銀行の一般預金には、これらの銀行以外のものもあるのだから、同日に於ける一般預金をこの金額から控除しても、正確ではない。併し、これらの銀行以外のものの一般預金は、

むしろ甚だ少額であるから、假にそれを見捨てるとすると、當日の一般預金は凡そ九千萬圓だから銀行の手許現金は三億四千萬圓程となる。——銀行の發表する現金有高といふものは、このやうな考慮を要する意味での現金である。

## 六

現金について更に知つて置かねばならぬことは、それが預金通貨と如何なる割合に於て、流通して居るかといふことである。これは、併し、直接に知る方法はない。吾々はただ、銀行に出入する状態より間接に推知することが出来るだけである。

東京手形交換所月報には、全國手形交換所加入銀行本支店、三百三十七行の、毎月末日に於ける現金、手形、小切手の收納高が掲げられてある。手形小切手による支拂、すなはち預金通貨を以てする支拂は、當然その全額が銀行を経由せざるを得ないのだから、毎月末日に於ける活動したる預金通貨はこの銀行の收納高によつて知ることが出来る。併し現金の支拂は、銀行を経由しないで行はれるものも澤山あるのだから、この銀行の一日收納高を以て、その日の世間に於ける現金決済高の全部とは勿論認めることが出来ない。尤も、現金の支拂といつても、大口のものは、支拂者が銀行から引出して支拂ふのであり、受領者も亦大抵直ちに銀行に預入れるのだから、銀行を経由しない現金支拂なるものは、口數は多くとも金額は少きものと見なければならぬ。

手形交換所月報には、ただ、毎月末日の分だけしか掲載して居らない。月の末日は、我が商慣

習上支拂決済日となつて居る特殊の日で、現金通貨も預金通貨も共に活潑に動く日である。故に平日の状態も併せ分らねば、全般的の立言は出来ないのであるが、平日のことは何等發表せられたいものがないから知る由がない。故に、今は末日だけの状態を知るに満足することとして、各月の月報より蒐集して見ると次の如くである。

全國手形交換所加入銀行各月末日收納高 (昭和七年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
東京	現手形 金手計 14,784 191,296 295,966 7.2% 92.8%	現手形 金手計 24,147 205,339 236,076 10.5% 89.5%	現手形 金手計 20,837 229,432 249,780 8.3% 91.7%	現手形 金手計 18,466 231,172 279,638 6.6% 93.4%	現手形 金手計 18,146 188,766 206,911 8.8% 91.2%	現手形 金手計 23,337 279,180 302,517 7.7% 92.3%	現手形 金手計 14,194 166,021 180,215 7.9% 92.1%	現手形 金手計 15,926 193,694 209,620 7.6% 92.4%	現手形 金手計 18,873 194,511 213,384 8.8% 91.2%	現手形 金手計 21,283 252,343 274,234 7.8% 92.2%	現手形 金手計 20,197 228,376 249,167 8.1% 91.9%	現手形 金手計 42,016 237,008 279,023 15.1% 84.9%
大阪	現手形 金手計 40,240 105,311 145,551 27.6% 72.4%	現手形 金手計 63,757 186,486 250,243 25.5% 74.5%	現手形 金手計 39,232 177,789 217,021 18.1% 81.9%	現手形 金手計 40,349 177,320 217,669 18.5% 81.5%	現手形 金手計 45,040 194,186 239,226 18.8% 81.2%	現手形 金手計 52,441 197,341 249,782 21.0% 79.0%	現手形 金手計 21,092 86,157 107,249 19.7% 80.3%	現手形 金手計 29,027 169,997 199,024 14.6% 85.4%	現手形 金手計 34,502 186,210 220,712 15.6% 84.4%	現手形 金手計 39,299 209,681 248,980 15.8% 84.2%	現手形 金手計 49,559 208,625 258,184 19.2% 80.8%	現手形 金手計 63,542 216,457 279,999 22.7% 77.3%
神戸	現手形 金手計 3,593 38,280 41,879 8.6% 91.4%	現手形 金手計 5,278 71,965 77,243 6.8% 93.2%	現手形 金手計 7,914 67,083 74,997 10.6% 89.4%	現手形 金手計 5,235 45,211 50,446 10.4% 89.6%	現手形 金手計 5,502 50,612 56,114 9.8% 90.2%	現手形 金手計 6,246 49,930 56,176 11.1% 88.9%	現手形 金手計 3,781 47,563 51,344 7.4% 92.6%	現手形 金手計 4,373 65,848 70,221 6.2% 93.8%	現手形 金手計 4,390 58,880 63,270 6.9% 93.1%	現手形 金手計 4,961 86,833 91,794 5.4% 94.6%	現手形 金手計 6,470 82,776 89,246 7.2% 92.8%	現手形 金手計 9,458 60,527 69,985 13.5% 86.5%

都	現手形 小切手 金手計	4,829 8,772 13,601 35.5 64.5	5,119 23,309 28,428 18.0 82.0	5,829 16,411 22,240 26.2 73.8	4,940 16,244 21,184 23.3 76.7	5,197 16,620 21,817 23.8 76.2	7,024 15,275 22,299 31.5 68.5	3,296 6,804 10,100 32.6 67.4	4,899 16,828 21,727 22.5 77.5	5,288 20,221 25,509 20.7 79.3	7,129 23,824 30,953 23.0 77.0	6,730 24,004 30,737 21.2 78.1	11,690 34,321 46,011 25.4 74.6
京	現手形 小切手 金手計	2,210 10,528 12,738 17.3 82.7	3,569 13,202 16,771 21.3 78.7	3,903 13,385 16,588 19.3 80.7	3,328 12,559 15,887 20.3 79.7	2,460 17,706 20,166 12.2 87.8	2,610 12,477 15,087 17.3 82.7	2,213 9,368 11,581 19.1 80.9	3,392 11,731 15,123 22.4 77.6	2,881 19,896 22,777 12.6 87.4	3,267 14,121 17,388 18.5 81.2	2,646 15,677 18,323 14.4 85.6	5,624 18,480 24,104 23.4 76.6
横	現手形 小切手 金手計	6,473 21,849 28,322 22.9 77.1	14,623 30,092 44,715 32.7 67.3	8,197 21,669 29,796 27.3 72.7	26,208 17,226 43,434 60.3 39.7	6,126 22,991 29,117 21.0 79.0	7,191 24,745 31,936 22.5 77.5	4,519 13,041 17,560 25.7 74.3	6,240 21,514 27,754 22.5 77.5	6,604 23,388 29,992 22.0 78.0	9,360 26,025 35,385 23.6 76.4	6,887 27,662 34,549 19.9 80.1	10,804 25,617 36,421 29.7 70.3
名	現手形 小切手 金手計	72,085 375,966 448,051 16.1 83.9	116,493 530,983 647,476 18.0 82.0	85,142 525,280 610,422 13.9 86.1	98,526 529,732 628,258 15.7 84.3	82,471 490,860 573,351 14.4 85.6	98,849 578,948 677,797 14.6 85.4	49,095 328,954 378,049 13.0 87.0	63,857 479,612 543,469 11.7 88.3	72,538 503,106 575,644 12.6 87.4	85,301 613,433 698,734 12.2 87.8	92,489 587,714 680,203 13.6 86.4	143,133 592,390 735,523 19.5 80.5
古	現手形 小切手 金手計	15,622 19,645 35,267 44.3 55.7	24,989 41,205 66,194 37.8 62.2	26,612 34,092 60,704 43.8 56.2	21,902 31,771 53,673 40.8 59.2	17,914 27,351 45,265 39.6 40.4	23,546 35,110 58,656 40.1 59.9	13,530 16,724 30,254 44.5 55.5	16,871 25,256 42,127 40.0 60.0	22,469 27,517 49,986 45.0 55.0	24,950 32,292 57,242 43.9 56.1	23,731 31,266 54,997 43.1 56.9	42,451 41,588 84,039 50.6 49.4
屋	現手形 小切手 金手計	2,210 10,528 12,738 17.3 82.7	3,569 13,202 16,771 21.3 78.7	3,903 13,385 16,588 19.3 80.7	3,328 12,559 15,887 20.3 79.7	2,460 17,706 20,166 12.2 87.8	2,610 12,477 15,087 17.3 82.7	2,213 9,368 11,581 19.1 80.9	3,392 11,731 15,123 22.4 77.6	2,881 19,896 22,777 12.6 87.4	3,267 14,121 17,388 18.5 81.2	2,646 15,677 18,323 14.4 85.6	5,624 18,480 24,104 23.4 76.6
六都市合計	現手形 小切手 金手計	72,085 375,966 448,051 16.1 83.9	116,493 530,983 647,476 18.0 82.0	85,142 525,280 610,422 13.9 86.1	98,526 529,732 628,258 15.7 84.3	82,471 490,860 573,351 14.4 85.6	98,849 578,948 677,797 14.6 85.4	49,095 328,954 378,049 13.0 87.0	63,857 479,612 543,469 11.7 88.3	72,538 503,106 575,644 12.6 87.4	85,301 613,433 698,734 12.2 87.8	92,489 587,714 680,203 13.6 86.4	143,133 592,390 735,523 19.5 80.5
六都市を 除く計	現手形 小切手 金手計	15,622 19,645 35,267 44.3 55.7	24,989 41,205 66,194 37.8 62.2	26,612 34,092 60,704 43.8 56.2	21,902 31,771 53,673 40.8 59.2	17,914 27,351 45,265 39.6 40.4	23,546 35,110 58,656 40.1 59.9	13,530 16,724 30,254 44.5 55.5	16,871 25,256 42,127 40.0 60.0	22,469 27,517 49,986 45.0 55.0	24,950 32,292 57,242 43.9 56.1	23,731 31,266 54,997 43.1 56.9	42,451 41,588 84,039 50.6 49.4



全國總計	現手形 割合	小切手 計	金手計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
87,707	395,611	483,318	18.1%	141,482	111,754	120,426	100,385	122,395	62,625	80,728	95,007	110,251	116,220	185,584	222,666
572,188	713,670	671,126	19.8%	550,372	561,503	518,231	614,058	345,678	504,868	530,623	645,725	618,980	633,978	819,562	774,444
81.9%	80.2%	83.3%	16.7%	681,931	618,616	736,453	408,303	585,596	625,630	755,976	735,200	819,562	774,444	774,444	774,444
			82.3%	16.2%	16.6%	15.3%	13.8%	15.2%	14.6%	15.8%	22.6%	22.6%	22.6%	22.6%	22.6%
			85.8%	18.4%	84.7%	86.2%	84.8%	85.4%	84.2%	77.4%	77.4%	77.4%	77.4%	77.4%	77.4%

全國手形交換所加入銀行各月末日收納高 (昭和八年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
東京	現手形 割合 { 現手形小切手 金手計	21,501 千円 209,681 221,182 9.3% 90.7%	21,293 千円 295,496 316,789 6.7% 93.3%	18,993 千円 259,822 278,815 6.8% 93.2%	18,442 千円 264,077 282,519 6.5% 93.5%	19,330 千円 266,009 285,329 6.5% 93.5%	29,252 千円 369,881 399,133 7.3% 92.7%	23,893 千円 282,151 306,044 7.8% 92.2%	18,830 千円 324,868 343,758 5.5% 94.5%
大阪	現手形 割合 { 現手形小切手 金手計	35,559 千円 210,525 246,086 14.5% 85.5%	37,472 千円 243,994 281,466 13.3% 86.7%	48,813 千円 250,024 307,837 15.9% 84.1%	38,416 千円 212,266 250,682 15.3% 84.7%	38,309 千円 250,952 289,261 10.1% 89.9%	60,236 千円 266,023 326,259 18.5% 81.5%	47,524 千円 253,187 300,711 15.8% 84.2%	42,404 千円 245,297 287,701 14.7% 85.3%
神戸	現手形 割合 { 現手形小切手 金手計	6,287 千円 57,484 63,771 9.9% 90.1%	7,129 千円 73,055 80,184 8.9% 91.1%	6,584 千円 62,179 68,763 9.6% 90.4%	7,419 千円 77,370 84,789 8.7% 91.3%	10,641 千円 69,556 80,197 13.3% 86.7%	6,913 千円 75,431 82,344 8.4% 91.6%	8,071 千円 80,949 89,020 9.1% 90.9%	4,402 千円 62,024 66,426 6.6% 93.4%

京 都	現 手 合 形 小 切 金 手 計 金 手 計 { 現 手 形 小 切 手 金 }	千円 5,353 21,993 27,346 19.6 80.4	千円 7,158 25,646 30,804 21.8 78.2	千円 6,890 22,135 29,025 25.7 76.3	千円 6,395 12,443 18,838 33.9 66.1	千円 6,280 23,192 29,472 21.3 78.7	千円 8,110 23,192 31,302 25.9 74.1	千円 8,310 21,639 29,999 27.2 72.3	千円 7,081 24,140 31,221 22.7 77.3
横 濱	現 手 合 形 小 切 金 手 計 金 手 計 { 現 手 形 小 切 手 金 }	千円 2,391 11,126 13,517 15.4 84.6	千円 3,116 10,702 13,818 22.6 77.4	千円 3,311 14,868 18,179 18.2 81.8	千円 3,505 18,432 21,937 16.0 84.0	千円 3,282 17,690 20,972 15.6 84.4	千円 2,786 13,097 15,883 17.5 82.5	千円 2,949 19,878 22,827 13.2 86.8	千円 2,739 11,641 14,380 19.0 81.0
名 古 屋	現 手 合 形 小 切 金 手 計 金 手 計 { 現 手 形 小 切 手 金 }	千円 8,048 23,892 31,940 25.2 74.8	千円 9,168 27,794 36,962 24.8 75.2	千円 5,848 22,890 28,738 20.3 79.7	千円 8,177 24,556 32,733 25.0 75.0	千円 5,713 27,958 33,671 17.0 83.0	千円 9,242 34,120 43,362 21.3 78.7	千円 6,993 26,984 33,977 20.6 79.4	千円 7,403 24,376 31,779 23.3 76.7
六 都 市 大 都 市 合 計	現 手 合 形 小 切 金 手 計 金 手 計 { 現 手 形 小 切 手 金 }	千円 79,139 534,701 613,840 12.9 87.1	千円 85,336 676,687 762,023 11.2 88.8	千円 90,439 640,918 731,357 12.4 87.6	千円 82,354 609,144 691,498 11.9 88.1	千円 83,555 655,357 738,912 11.3 88.7	千円 116,539 781,744 898,283 13.0 87.0	千円 97,740 684,338 782,078 12.5 87.5	千円 82,919 692,346 775,265 10.7 89.3
六 他 大 都 市 合 計	現 手 合 形 小 切 金 手 計 金 手 計 { 現 手 形 小 切 手 金 }	千円 23,011 28,578 56,589 49.5 50.5	千円 22,180 38,038 60,218 36.8 63.2	千円 27,162 47,695 74,857 36.3 63.7	千円 28,052 36,105 64,157 43.7 56.3	千円 22,131 38,587 60,718 36.4 63.6	千円 29,461 53,455 82,916 35.5 64.5	千円 31,385 44,420 75,805 41.4 58.6	千円 23,249 37,457 60,706 38.3 61.7

全國總計	現金 合計	現形 合計	小切手 合計	現金 合計
	107,150 563,279 670,429 16.0 84.0	107,516 714,725 882,241 13.1 86.9	117,601 688,613 806,214 14.6 85.4	110,406 645,249 755,655 14.6 85.4
	105,686 693,944 799,630 13.2 86.8	146,000 835,199 981,199 14.9 85.1	129,125 728,758 857,883 15.1 84.9	106,168 729,803 835,971 12.7 87.3

この表を仔細に觀察すれば、我が國に於ける現金通貨と預金通貨との活動流通の有様を知ることが出来るのであるが、私は今それらに關する各般の問題に論及するの暇がないから、單にこれによつて、讀者に、——殊に私などのやうに、平生、現金通貨ばかりしか取扱つたことがなく、通貨といへば、無意識的に預金通貨の存在を閑却して、現金通貨だけを聯想する習慣のある讀者に——現金通貨なるものが、實際の取引に於てはむしろ、如何に小さな役割しか受持つて居ないかを傳へ得れば足るのである。

但し、ここに注意すべきことは、この場合に於ても銀行が現金として報告して居るものの中には、銀行會計の技術上、現金でないものが包含されて居ることである。例へば交換上『負け方』となつたとき、それを補充する日本銀行預金の引出傳票の如きが、出納係に於てはその帳簿上、現金として取扱はれて居るのである。故に正確に現金の銀行への收納高を知らんとすれば、前掲の數字から、負け方銀行の交換計算に於ける貸方額合計を控除せねばならぬのである。併しその金額は今これを知る由がないから、こゝではたゞ右統計表の現金の金額は、實際に於ては更にそれ

よりも少きこと、従つて預金通貨に對する歩合も更に少きことを注意すれば足るのである。

## 七

以上述べたる所によつて、我が金融界にあつては、——そして、それは經濟の進歩した所ではどこでも同様であるが——預金通貨が金額の上では現金通貨よりも遙に重要な地位を占めて居ることが分るであらうと思ふ。

今日の金融機構、特に銀行組織の中に常に流出入して居る通貨状態にありては、現金通貨は、集つて若しくは纏つて相當の額となれば、必ず銀行に預入れられる。然るときは、預金者の手許にあつた現金は預金となつて存在することとなる。この預金を彼が現金を以て引出せば、元のまゝの現金となつて流通界に還るのであるが、小切手を以て他人への支拂に充つるならば、ここに現金通貨の預金通貨への轉化となるのである。例へば小賣商がその賣上金を纏めて銀行預金となし、月末に卸賣商へ小切手を以て支拂ひ、卸賣商も亦生産者その他に小切手を以て支拂ふならば、現金通貨が預金通貨に變つて金融界に働くこととなつたのである。

預け入れを受けた銀行は預金の現金引出に應ずるため、常に預金状態に適應する所の現金準備をもつ。若し、現金の預入れがその引出しより多ければ、この現金準備は次第に増加し、必要とする準備額を起ゆる。然るときは、銀行は、その超過部分を日本銀行に預入れる。現金はここに於て、預金として存在する。謂はゆる潜在通貨となるのである。そしてこの場合に於ても、預金

者とその取引銀行との場合と同じく、その銀行が、預金の現金準備を補充する必要上、これを現金を以て引出せば、預金は元の現金となつて、流通界に還るのであるが、その銀行が小切手を以てそれを引出すならば、預金通貨となつて活動したことになるのである。すなはち、その銀行が、前に現金を以て預入れた日本銀行預金を、コールに運用し、公債に應募し、證券を買入れ、爲替資金に利用するなどのために、小切手を以てこれを引出すならば、やはり、現金通貨の預金通貨への轉化が起るのである。

日本銀行に預入れられた現金、すなはち補助貨幣や日本銀行兌換券は、その預入れと同時に現金ではなくなる、補助貨幣は、そこでは政府の特殊の預り金であり、兌換券は發行高の減少として取扱はれる。たゞそれらに對應する所の一般預金が、金融的意味に於て潜在通貨として残るのである。若しも、この潜在通貨が小切手を以て引出され、預金通貨として支拂の決済に充てらるゝならば、現金通貨は、それだけ金融界より減退したことになる。この點は、普通銀行がその得意先より現金を以て預金の預入を受け、それが小切手を以て引出されたのと異なる所である。

これと反對に、預金者が小切手を以て預入れた預金を現金を以て引出し、銀行が小切手を以て日本銀行の預金となしたものを、預金の現金支拂準備を補充するために、現金を以て引出すならば、預金通貨の現金通貨への轉化がある。例へば、生産者や卸賣商が、俸給勞賃の支拂のために現金を以て預金の引出をなす場合、またそれらの現金支拂に應ずるために、銀行に於て、拂出す

現金の方が預入を受くる現金よりも多額に上る場合には、預金通貨の現金通貨への轉化があるのである。

かくの如く、現金通貨と預金通貨とは、銀行といふ機構、——預金者と普通銀行、普通銀行と中央銀行、それらの間の預入れと引出が、現金と小切手と入れ替りに行はるる機構——によつて常に相互の轉化が行はれるのである。そして貸附割引といふことを除き、及び、貸附割引による預金の創作といふことを除き、單に預金の預入れと引出といふことだけから言へば、銀行券の發行は、預金通貨の現金通貨への轉化であり、その收縮は、反對に現金通貨の預金通貨への轉化である。そして貸附割引及びそれによる預金の創作は、特殊の例外的場合を除いては、預金通貨の創作でもある。

普通銀行たると日本銀行たるとを問はず、貸附割引を許容することにより預金を創作すれば、通貨母體すなはち潜在通貨を膨脹せしめることとなり、それを回収すれば、通貨母體を收縮することとなる。そして通貨母體の膨脹收縮は多くの場合には、第一次的には預金通貨の膨脹收縮となるものであり、第二次的に現金通貨の膨脹收縮となるものである。何となれば、貸附割引及びそれによりて創作せられたる預金は、多くは生産資金若しくは商業資金として小切手を以て支拂の決済に充てらるゝものであり、それらが更に生産者により若しくは商人により生活費または俸給勞賃として支拂はるゝときに、現金が用ゐらるゝことになるからである。

かくて、一口に言へば、纏れば預金通貨となり、散すれば現金通貨となるのが、通貨なるものの銀行機構の下に於ける本来の姿である。

## 八

今、我が國に於ける、現下の金融状態を見るに、一つは政府の支拂増加により、他は、貿易利潤の増大により、遊資の増加となる傾向があるのであるが、それは、預金通貨と現金通貨との共同母體たる潜在通貨の膨脹である。これが生産關係、商業關係、資金關係に働く限りに於ては、單に預金通貨の活動があるだけである。併し、これが、事業利益の分配として散布せられ、または俸給勞賃等として支拂はれ、それらにより更に生活費として支拂はることが多くなれば、小賣取引に要する貨幣、すなはち、現金の需要を増加することとなり、それに従つて、現金通貨の分量を増加し、その流通を活潑ならしめる。

然るに、今日の金融政策として、我が日本銀行は、その手持公債をなるべく市中に賣放つ方針をとつて居る。この公債の賣出さることの多きほど、遊資たる通貨母體すなはち潜在通貨は、現金通貨ともならず、預金通貨ともならずして、手持公債の減少、そして一般預金の減少として、日本銀行に於て吸取されて仕舞ふのである。

世間では、日本銀行の公債賣出は、一旦膨脹したる現金通貨すなはち日本銀行兌換券を收縮せしむるものの如くに考へて居るものもあるけれども、それはさうではなくして、この通貨母體た

るものを吸収して仕舞ふ關係に於て、現金通貨の膨脹を惹き起さしめないものである。

さて、貿易關係のことは別として、政府の支拂關係のみについて言へば、拙著『金融工作論』に於て詳細に述べた如く、我が國のインフレーションは、(1)公債の發行——日本銀行の引受け——政府預金の増加、(2)政府の支拂小切手の振出——企業に於けるその受領——市中銀行への預入(3)市中銀行の預金増加——手形交換の増加——日本銀行に於ける一般預金の増加(若しくは民間貸出の減少)——政府預金の減少、(4)企業間の支拂——手形交換の増加——日本銀行に於ける一般預金の減少(若しくは民間貸出の増加)——市中銀行に於ける當座口振替の増加、(5)企業に於ける俸給勞賃の現金を以てする支拂——市中銀行の現金有高の減少——日本銀行に於ける一般預金の減少(若しくは民間貸出の増加)——銀行券の發行、といふ段階を経過するのである。

それ故に、我が金融界は、今日、政府の財政支出の支拂關係により、後に示すが如く、預金通貨の活動が頗る活潑となり、手形交換高の激増となつて居る。そして、世間では往々この傾向は、結局に於て現金通貨の膨脹とその流通速度の増加とを頗る著しく惹き起し、動もすれば、ドイツの亞流の如き現金インフレーションを齎らすものと考へて居るやうであるが、この政府の支拂が現金通貨の膨脹を惹き起すには、實は、金融界に於ける或る一定の條件が必要なのである。

その一定の條件といふは、市中銀行の手許現金有高の多少である。預金の現金支拂準備金の多少である。前の(5)の段階に至り、市中銀行より現金が引出さることとなりたるときに、その銀



行が手許現金有高が豊富であるならば、別に日本銀行より現金を以て預金の引出をなさずとも、その拂出に應ずることが出来る。故に日本銀行兌換券の増發とはならない。

若し、その銀行が、そのとき、手許現金有高が少きとき、若くは、その預金の引出によつて現金有高が減少するに至るときは、預金の支拂準備に差支を生ずることとなるから、直ちに、日本銀行に對して、現金すなはち兌換券を以て、預金の引出をなすか、貸出を求むることとなる。然るときには、兌換券の増發となる。

すなはち、市中銀行は、更めて言ふまでもなく、常に現金の出入あるものである。その出入の狀態に於て預金の支拂に支障を生ずることなければ、兌換券を日本銀行に請求しない。支障を生ずるに至つてこの請求をするのである。故に、政府の支拂資金が前述(5)の段階に至つて、市中銀行よりの現金の引出が、この支障を生ぜしめる程度であるかどうか、兌換券の増發となるかどうかを決定するのである。

## 九

俸給勞賃として現金を受領したものは、それを大部分生活費に充てる。すなはち、主として小賣商への支拂となる。小賣商はこの賣上金を以て、そのまま卸賣商への仕入代金として支拂ふことがあり、また、一應は銀行の預金とすることがある。後の場合には、一旦銀行から拂出された現金が直ちにまた銀行に還ることとなる。前の場合に於ても、現金は、卸賣商の手をくぐるだけで、

これも直ちに銀行に還り來るのである。

それ故に、俸給勞賃の支拂のために、銀行から現金が引出されても、直ちに、若くは、聽て、それは銀行に還り來る。銀行は、この還り來る現金によつて、その預金に對する支拂準備の必要額に超過することとなれば、その超過分の現金を以て日本銀行の預金とする。然るときは、一旦増發せられたる兌換券の收縮となる。

かかる次第であるから、(5)の段階に於ける市中銀行よりの現金引出が、その前に引出されたる現金の未だ銀行に還らない間に、更に追つかけるに起るのでなければ、兌換券の増發とはならないのである。それが追つかけるに而も累積的に起るに及んで、初めて現金のインフレーションとなるのである。この點は、貨幣の對外價值の遞次的暴落によつて、銀行預金機能の殆ど消失したドイツのインフレーションの場合と甚だ趣きを異にする所である。そして、それが、我が國の論者に於て多くは見落されて居る點である。

## 一〇

かくて我が國に於ては、政府の支拂によるインフレーションは、通貨母體たる銀行預金の創作——公債の引受けによる日本銀行に於ける政府預金の創作——に初まり、それが民間に浸潤するに従つて、潜在通貨の膨脹と預金通貨の活潑なる活動とを見るに至つた。本年八月末日の全國手形交換所加入銀行の預金總額は六、三四三、七八四千圓で、前年同日に比べて、七六五、七四九

千圓の増加であり、貸出は、むしろ前年同日に比べて、四七、三八七千圓を減じて、五、一〇四、五

全國手形交換所手形交換高 (一月乃至八月合計)

		枚 數		金 額	
		昭和八年	昭和七年	昭和八年	昭和七年
東京 大阪 神戸 京都 横浜 名古屋	枚	8,810,243	8,112,111	円	16,702,542,014
		6,698,548	6,027,332		9,978,502,854
		1,687,593	1,528,731		2,139,077,103
		1,392,503	1,335,159		691,377,607
		540,754	501,735		623,391,964
小計 其他 三十ヶ所		1,431,645	1,314,072		1,478,396,290
		20,561,286	18,819,140		31,613,287,832
合計		3,169,822	3,033,537		1,462,820,190
		23,731,108	21,852,677		33,076,108,022

潜在偏向性の我がインフレーション

八一千圓となり、従つて預金の貸出に超過する額は、前年同日の四二四、〇六七千圓に比べて、一、二三九、二〇三千圓となり、實に、八一五、一三六千圓の増加となつて居る。すなはちそれだけ遊資が増加したのである。

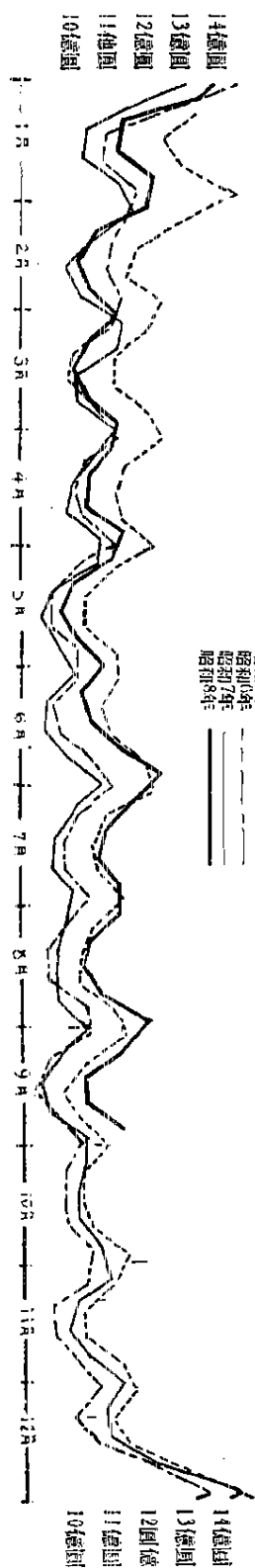
この預金の増加、すなはち潜在通貨の膨脹により、預金通貨の流通は甚だ活潑となつた。それは手形交換高の増加となつて現はれて居る。今、六大都市及びその他の三十箇所の手形交換所の一月乃至八月の交換高合計を比較すれば、上の如くであつて、枚數金額共に著しき増加を見るのである。

更に兌換券の週平均發行高を見るに、昨年十月一日は一、〇三一、七二四千圓で、本年九月三十日は、一、一二三、〇三六千圓、すなはち凡そ九千一百萬圓の増加である。

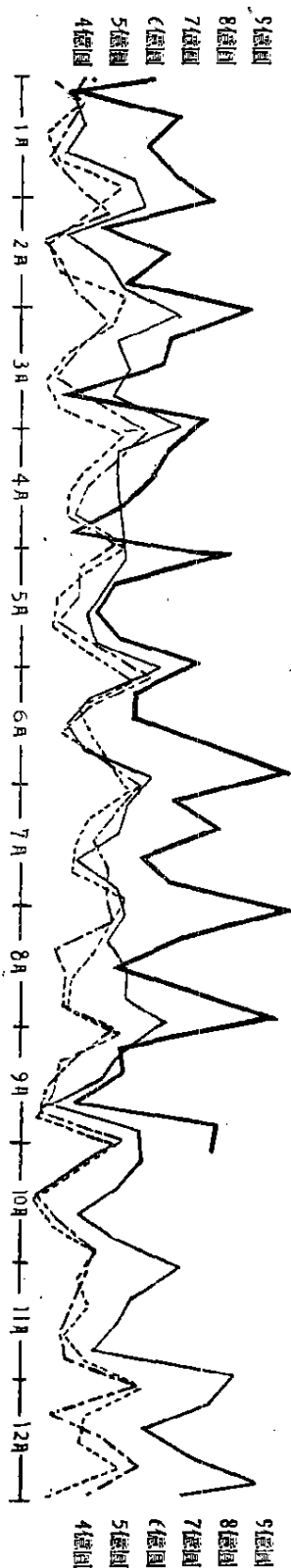
今、全般的觀察を容易ならしむるため、東京及び大阪

の兩手形交換所交換高と日本銀行兌換券發行高との増加の有様を圖表にて示せば次の如くである。

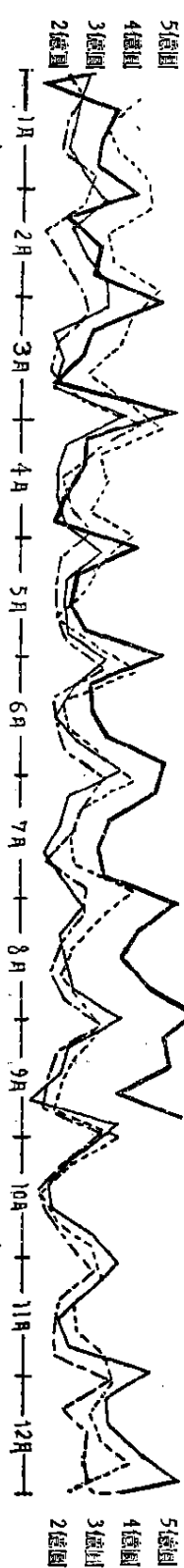
日本銀行兌換券發行高 (週平均)



東京手形交換所社員銀行手形交換高 (週合計)



大阪手形交換所組合銀行手形交換高 (週合計)



この圖表によれば、我が國のインフレーションは、今日までの所、主として預金通貨に於て生じたもので、現金通貨に於てはまだ微弱なるものなることが了解せられるであらう。また、前に掲げたる銀行の各月末日に於ける現金と手形小切手との收納高比率を見ても、次第に、前者に對する後者の割合を増加しつつあるを發見するのであるが、この事實も亦、現金通貨に於けるよりも、むしろ預金通貨に於ける膨脹を明かに示すものである。そして、現金通貨は世人一般にその増減が感知せられ易く、預金通貨は、世間の大衆とは關係が直接的でないから感知せられること薄く、甚だ潜在的である。それ故に、私は、これを潜在性インフレーションといふのである。

また、我が國のインフレーションは、今日までの所、預金通貨を以て行はると共に、それは政府の大口消費に於て行はるのであるから、政府の消費貨物の生産關係筋をたどつて影響があるに止まる。従つて、特殊商品、例へ鐵鋼、石炭、セメントの如き、軍需及び土木關係の商品に於て代價の騰貴を惹き起した。併し、未だ現金通貨のインフレーションには、ただ僅の程度しかなつて居ないから、一般物價の騰貴は著しくはない。それ故に、私は、これを偏向性インフレーションといふのである。(終)

— 八・一〇・一四 —